

Title	日本語の談話標識「まあ」の分析
Sub Title	Etude du marqueur discursif maa en japonais
Author	芦野, 文武(Ashino, Fumitake)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2021
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.121, No.2 (2021. 12) ,p.128- 142
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	荻野安奈教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01210002-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本語の談話標識「まあ」の分析¹

芦野 文武

1. 導入

日本語の談話標識「まあ」は、話し言葉で頻出するマーカーであり、しばしば対話において話者の反応として機能するだけでなく、独話や様々なジャンルの語りでも出現する。それに加え、「まあ」は様々な意味・用法を持つ、多機能的なマーカーでもあり、例えば『明鏡国語辞典』は次のような3つの用法を区別している。

- (i) まあ、あきれた。 [感動詞]
- (ii) まあ、上出来のほうだ。 [副詞]
- (iii) まあ、おすわりなさい。 [副詞]

同辞典によると、(i) は、「驚いたとき、感心したとき、意外に思ったときなどに発する語」（「多く女性が使う」とされる）、(ii) は、「十分ではないが、とりあえずは満足できる気持ちを表す」、(iii) は、「相手の気持ちをなだめたり、とりあえずあることをするようにうながしたりするさま」と記述されている²。

本稿では、「まあ」についての統一的仮説を提案し、「まあ」の様々な用法は、仮説を構成する2つのパラメーターの間の関係が、文脈に応じて様々に解釈されることから記述できうることを示そうとする試みである。

2. 先行研究

「まあ」についての先行研究は多数存在する。そのうち、「まあ」に統一的仮説を与えている研究として次の3つを挙げることができる：「ひとまず大まかにひ

きくくって述べる概言」(川上1993:72),「ある前提から結果へと至る計算処理過程が曖昧であることを示す,あるいは計算に至る前提そのものが明確ではないことを示す」(富樫2002:24),「内心にわだかまりがあるが,それにはこだわらずに言語行為を行うという話し手の態度に対応している」(大工原2015:99)。いずれの研究も,「まあ」が表すある種の曖昧性や不確定性に注目している点が共通していると言えるが,大工原(2015)はこの点についてより形式的な定義を与えている。大工原の言う「内心のわだかまり」とは,話者がある言語行為Xに関して,それに対応する思考・感情 x と,それに相反する $\neg x$ を併せ持つ状態と定義される(*Ibid.*:100)³。

本稿でも, x と $\neg x$ (本稿では p と $\text{non-}p$)の間の関係に重要性を与えるという意味では大工原(2015)のそれに近いが, p と $\text{non-}p$ の間の関係をより詳細に検討することで,「まあ」に5つのタイプの用法を区別することを提案する。そして,これら5つのタイプの用法は,「まあ」の意味を構成するパラメーターである p と $\text{non-}p$ がとりうる5つの関係として記述できることを示す。

3. 「まあ」の仮説

本稿では,「まあ」の仮説を次のように提案する。

「「まあ」は, P に関して,話者が p を適切な値として付与できないことをマークする」

以下,この仮説について補足的コメントを行う。

— P は「まあ」のスコープであり,事態や状況に相当する。

— p は P に対する肯定的な評価・態度を指す⁴。つまり,「確かに P である」/「 P であることに間違いがない」など, P の確定(validation)を意味する評価である。この P の確定を $P = p$ で表す。

—「話者が p を適切な値として付与できない」のは,事態 P の評価に関して, p と競合する「まあ」のもう1つのパラメーターである $\text{non-}p$ (P に対する否定的な評価)を排除できないことを意味する。 $P = \text{non-}p$ は, $P = p$ の否定, $P = p$ でない可能性など文脈によって様々な解釈を受ける。したがって,「まあ」が, P に対し

て、 p を適切な値として付与できないとは、 P に関して、 $P = p$ と同時に $P = \text{non-}p$ という評価がなされることにより、結果として、 P の評価が安定化されないまま保たれることを意味する⁵。

—「まあ」の多機能性は、 P に対する評価である p と $\text{non-}p$ が取り持つ関係の違いによって記述でき、5つのタイプが区別できる。

以下、この仮説に基づき、「まあ」の5つのタイプの用法を順に分析していく。

4. 「まあ」の5つのタイプの用法

4.1. 強い驚き

まず、「まあ」が「感嘆詞」としてみなされているケースを扱う。

(1) [予期せず知り合いに遭遇する場面で] まあ、鈴木さん！

(2) [相手の度を越えた態度に対して] まあ、失礼ね！

これらの例文において、「まあ」は、ある事態 (P) の不意の到来／発見に対する話者の強い驚きや、心外の感情を表している。この解釈は、本稿の「まあ」の仮説からどのように説明できるのだろうか。

「まあ」のスコープである P は、広い意味で「ショッキングな出来事」と解釈できる。すなわち、一方で、話者は P に対して、 p を付与しようとする。つまり、 P は確かに起こった出来事である ($P = p$) と認めようとする。しかし、他方で、ショッキングな出来事である P は、話者にとっては、あり得ない／起こるはずがないことである ($P = \text{non-}p$)。

したがって、この用法において、「まあ」が「 P に対して p を適切な値として付与できない」のは、 P に関して、話者の2つの態度である p と $\text{non-}p$ が分離できないからであると考えられる。その意味で、 P はいわば「認識不可能」(inconceivable) な事態として提示されることになる⁶。

(1) においては、 P 「鈴木さんと遭遇すること」が、話者にとってはショックであり、実際にそうである ($P = p$) という事実と、そうではない・あり得ない ($P = \text{non-}p$) の間にあって、話者は P に対して安定した値 p を付与するに至らないのである。「まあ」は、まさか会うはずのない ($P = \text{non-}p$) 鈴木さんがそこにいる ($P = p$) というショックを前にした話者の強い驚きを表していると言える。(2) では、相手の取った態度 ($P = p$) が、相手をとる態度としてはあり得ないこと (P

= non-p あまりに失礼であること)として提示されていると考えられる。

この用法の「まあ」は対話においても現れ、共話者 (A) の発言に対する話者 (B) の反応として機能する場合もある。

(3) A: 先日、祖母が突然亡くなったんです。B: まあ ... そうでしたか ...
この例文でも、「まあ」は、P (祖母が亡くなったこと) に対して、話者がそれを事実である (P = p) と認識しようとする態度と、そんなことはあり得ない (P = non-p) という評価が切り離せないことを表している。

最後に、「まあ」が、次のように肯定的な評価を表す文脈で現れる場合を考えてみよう。

(4) [料理を食べて] まあ, おいしい!

(4) においては、問題の料理 (P) に対して、これほどおいしいということ (P = p) が信じられない (P = non-p) ののである。したがって、「まあ」は単に料理のおいしさに高い評価を表しているというよりも、料理の (あまりの) おいしさに対して、それを正しく評価できないことを表していると考えられる。

「ああ」との比較

この用法における「まあ」の特徴は、P に関して、p と non-p が分離できないことであることを見た。この点が、いくつかの文脈で「まあ」と交替可能な「ああ」との違いを説明する。(1) と (3) における「まあ」を「ああ⁷」で置き換えた次の文を観察してみよう。

(1') あっ、鈴木さん!

(3') ああ... そうでしたか...

これらの文においては、「ああ」は「まあ」と交替できるが、解釈は同じではない。「ああ」のごく初歩的な仮説を「話者が P (事態・事実) を認識すること」としよう。すると、(1') と (3') において「ああ」は、「鈴木さん (がいること)」と「(共話者の) 祖母の死」を話者が認識することをマークすると言える。この意味で、「ああ」は、P を認識していない状態から P を認識する状態に至るという移行を強調しているのに対して、「まあ」は、その構成要素 non-p のために、P を「認識不可能」として提示することを強調すると言える。言い換えれば、「ああ」は P = p のみを考慮し、「まあ」は P = p, P = non-p を切り離さず考慮するということである。

両者のこのような違いは、森田（1989：1037）が指摘するように、「まあ」が話者の「内部的な原因だけから生起する事柄」を表すことができないという制約を説明すると思われる。

(5) {まあ／ああ}, a. びっくりした！ b. うれしい！ c. おいしい！

(6) {*まあ／ああ}, a. おなかがすいた！ b. 痛い！ c. 分かった！

(6a) のみを例にとると、ここで「まあ」が使えない理由は、「おなかがすいた」は純粹に話者の内的生理状態であるため、話者はPのみを認識する（すなわち $P = p$ ）ことしかできず、non-p が想定できないためであると考えられる。「まあ」が使えるようになるためには、P を外部化する必要がある。実際、P が共話者（A）に属している次の文では、話者（B）は「まあ」を使って反応することができるようになるのである。

(6a') A：ああ、おなかがすいた。 B：まあ、もうおなかがすいたの？！

4.2. 閉塞状況打開の模索

次に、「相手の気持ちをなだめたり、とりあえずあることをするようにうながしたりするさま」（『明鏡』）と記述されている「まあ」の用法を扱う。

(7) 「事務所に入ってきた共話者が立ったままで何もしないのを見かねて」
まあ、（とりあえず）おかけください。

(8) 「激しく動揺する共話者に」 まあ（とにかく）落ち着いて。

まず、この「まあ」の用法が現れる文脈を観察すると、少なくとも次の3つの特徴を挙げることができる。1つは、様々な意味で「閉塞した状況」が存在するということである。2つ目の特徴は、「まあ」がしばしば、命令形を伴い、話者が共話者に対して何らかの助言や提案をする文脈であるということである。3つ目の特徴は、「まあ」がしばしば「とりあえず」や「とにかく」などの談話標識と共に起することである。非常に大雑把に言えば、これらの談話標識は、何れともあれ行為を行うこと——それは、何もしない状態や、今ある状態から、別の状態へ移ることである——を強調すると言える。

以上を考慮すると、この用法の「まあ」は、ある「閉塞状況」が与えられ、それを打開すべく、話者が共話者に対して与える何らかの助言や提案と共に用いられると言える。この助言や提案を「まあ」のスコープであるPと考える。

(7) では、どのような行動をとってよいかわからない状況にある共話者に対し

て、話者によってP「おかけください」が提示されている。話者は、「まあ」を使うことによって、P「おかけください」が、閉塞状況を脱するために実行すべき適切な行動 ($P = p$) と評価する（「Pは確定すべきことである」 $\langle P \text{ est à valider} \rangle$ ）。(8)でも、P「落ち着いてください」という助言が、動揺した状態から抜け出すために、共話者がとるべき行動として適切である ($P = p$) と提示される。

いずれにしろ、これらの例においては、とにかく閉塞した状況を打開することが重要であり、そのためにPを行うこと ($P = p$) が提案や助言として示される。その意味で、「まあ」の意味のもう一つの構成要素であるnon-p（「P以外にやるべきこと」と解釈できる）は存在こそするが、話者はそれを考慮する段階まで至っていないと考えられる。したがって、「まあ」のこの用法においては、 $P = \text{non-p}$ は、 $P = p$ に対して、周辺的なステータスしか持たないと言える。

(7)と(8)に見られるように、この用法の「まあ」は命令文と共起することが多いが、命令文であればどのような場合でも「まあ」が使えるわけではない。既に見たように、Pが何らかの閉塞した状況であると解釈される必要がある。実際、次の例においては、共話者がどのような行動をとるべきか迷っている場合や、Pをなかなか実行しないような状況を想定するのでなければ「まあ」は使いにくい。

(9) [教師が教室で学生に] ? まあ, 窓を閉めて下さい。

(10) [診察で医者が患者に] ? まあ, 口を開けてください。

同様に、共話者に行動をためらわせるような状況が無い場合も、「まあ」に制約がかかる。

(11) { ? まあ / ø }, パンフレットはご自由にお取りください。

4.3. 留保・曖昧性

この3つ目のケースでは、「まあ」のスコープであるPは、「まあ」の前文脈に現れ、安定化されていない状態 ($P = p$ なのか $P = \text{non-p}$ なのかが確定していない状態)にあるという特徴を持つ。以下、3つの下位ケースに分けて考える。

4.3.1. 曖昧な返答

まずは、「まあ」の前文脈に、Pが疑問（自問型も含む）の形で現れているケースを検討する。

(12) A: 最近会ってないけど、太郎は元気かな。 B: まあ、元気だと思うよ。

(13) A: 今日は勉強したの? B: まあ、したよ。

これらの例において、Pが疑問の形で提示されるということは、Pがpなのか ($P = p$)、そうでないのか ($P = \text{non-p}$) がまだ確定していないことを意味する⁸。「まあ」を伴う返答は肯定 ($P = p$) で表されているため、話者は、Pについてpを優先的に選択すると提示するが、それと同時にnon-pの選択の可能性も保持していると考えられる。つまり、Pに関して、どちらかと言えばpが選択されていることが「まあ」によって示されているのである。その意味で、この用法においては、「まあ」の意味を形成する2つの構成要素が共存していると言える。ただし、あくまでもpが選択される (cf. 肯定の返答) ため、pとnon-pが同じウエイトで共存しているのではなく、pにウエイトが置かれていると考えられる。

(12) において、Pは(「太郎が元気か否か」)に相当する。「まあ」は、p「太郎は元気である」という値を選択する ($P = p$) が、同時に「太郎は元気ではない」 ($P = \text{non-p}$) 可能性も保持する。そこから、Pに関するpの選択が、「留保付き」であることが示されると考えられる。その留保的性格は、さらに、「思う」という述語によって強化されると考えられる。と言うのも、「思う」は、pの選択があくまで話者の主観に基づいたものにすぎないと提示するからである。(13) では、P「勉強したか否か」に関して、p(したよ)が話者によって選択されており、その意味で $P = p$ が優先される。しかし、「まあ」によりnon-pが保持されていることで、Pに関して、「完全には／正確にはPではない」という側面が付け加えられ、「勉強をするにはしたが、十分ではないかもしれない」という解釈が生ずると考えられる。

4.3.2. 概言

(14) 完璧な理論などないということ。まあ、これが結論ですね。

(15) 1980 年に消費税だから、まあ、2100 円ぐらいかな。(富樫 2002: 24)

これらの例文においては、P (主張, 計算の結果) は、その後安定化される ($P = p$) ことを待機している状態として提示されている。「まあ」の後文脈において、Pは $P = p$ として提示されるが、「まあ」の構成要素であるnon-pは、Pに関して、最終的に $P = p$ であるという保証はないということの意味する。したがって、ここでも、 $P = p$ であることは優先されるが、 $P = \text{non-p}$ の可能性を排除できないため、最

後まで安定化（つまり $P = p$ であること）が得られないことになる。結果として、(14) と (15) においては、「まあ」は、 P に関して、それが決定的なものではないという解釈を与え、以後に修正される可能性を示唆するのである。このような用法の「まあ」は、「大体」、「ぐらい」などのマーカーと共にしやすいが、これらのマーカーは、 $P = p$ の関係が決定的なものではないという側面を強化していると考えられる。

4.3.3. 返答と概言

次のような例は、概言が応答の中で現れると言う意味で、4.3.1. と 4.3.2. を組み合わせたケースと考えられる。

- (16) A：来週フランスへ行かれると聞きました。ご旅行ですか？ B：まあ、
そんなところです。

この文において、共話者Aは、話者Bに、 P （「フランスへ行く目的が旅行であるか」）について確認しようとしているが、Bは「まあ」を使うことにより、 p を優先しつつも、 $\text{non-}p$ を排除しないことで、 P を確定すること（ $P = p$ ）を避けている。つまり、「まあ」によって、 P が完全な回答ではない可能性を示唆したり、フランス旅行の目的は実は他にもあるが、Bはそれについてわざと明言を避けることもできるのである。

以上3つの下位ケースを見たが、この第3のケースにおいては、「まあ」は P に関して、 p を $\text{non-}p$ よりは適切な値と提示することで p を優先するが、 $\text{non-}p$ も保持する。その意味で、この用法の「まあ」は P の非限定性（indétermination）を強調した用法と考えられる。「まあ」が意味するとされる「曖昧性」、「留保」、「概言」などはこの P の非限定性から生ずると思われる。

4.4. 問題視・無関心

4.3. と同様この4つ目のケースにおいても、 P は「まあ」の前文脈に現れる。しかし、4.3. とは異なり、 P は共話者によって既に確定した状態（ $P = p$ ）として提示される。したがって、前文脈で安定化したとみなされている $P (= p)$ に対して、話者は「まあ」によって $P = p$ 、 $P = \text{non-}p$ という2つの態度を示すことになる。4.3. と同様、「まあ」の2つの構成要素は共存すると言えるが、このケースにおいては、 p よりも $\text{non-}p$ の方にウエイトが置かれると考えられる。つまり、前文脈に

において既に安定したとみなされる $P = p$ に対して、「まあ」は、 $P = p$ よりも、 $P = \text{non-}p$ の方を優先させ、 P に対する否定的なコメントを与えるという機能を担っていると考えられる。結果として、この用法の「まあ」は、前文脈において（多くの場合）共話者によって提示された P の有効性を問題視したり、それに対して修正を加えたり、さらには、 P に対する話者の無関心を表明するなどの様々な解釈を生じさせることになる。

4.4.1. 疑問視・無関心

次のような例では、共話者Aは P を確定したもの（ $P = p$ ）として提示するが、話者Bは「まあ」を用いることで、 $P = p$ よりも、 $P = \text{non-}p$ の方を優先させていると考えられる。

(17) A：負けましたけど、全力でプレーしました。B：まあ、（でも）もう少し頑張れたんじゃない？

(18) A：結局試験は受けないことにしました。B：まあ、好きにすれば。

(17)においては、共話者Aは $P = p$ であるとする（「全力でプレーした」が確かなことであるとする）が、話者Bは、「まあ」を用いることで、 P を認めつつも、 P は十分ではない（ $P = \text{non-}p$ ）という否定的な評価によって、 $P = p$ を疑問視している。(18)では、 P （共話者Aが受験を諦めること）はAの決意と解釈されるという意味で、Aにとっては $P = p$ であるが、話者Bは、 $P = p$ をAの決意として考慮しつつも、 P は自分自身には関わらない（ $P = \text{non-}p$ ）問題であると提示する。すなわち、この場合、 P に対しての $P = \text{non-}p$ という評価は、 P が適切であるかというよりも、 P はAにのみ属する問題であり、Bには関係しない、というある種の「無関心」を表していると解釈できる。

4.4.2. 譲歩

先行研究が指摘するように（cf. 川田2010, 馮2019）、「まあ」はしばしば、「けど」などが導入する譲歩節の前件に現れる。

(19) A：この件、何とかならない？ B：まあ、一応やってみるけど、難しいと思うよ。

(20) A：書類の締め切りは今日じゃなかったの？ B：まあ、今書いてるんだけど、ちょっと今日は厳しいかもしれない。

これらの例においては、Pは共話者Aによって実現が期待されているが、話者にとっては実現が困難な事態と解釈される。(19)でも(20)でも、共話者AによってPの実現($P=p$)が期待されており、話者Bは、「まあ」によって、Pを実現する($P=p$)ための努力を完全に放棄するわけではないことを示しつつも、実現不可能($P=\text{non-}p$)である可能性の方が高いことを伝えている⁹。

4.4.3. 主張の和らげ・修正

次の例文に見られる「まあ」の用法も、Pに対して、pよりもむしろnon-pを優先させていると考えることができる。

(21) 私は仏検を持ってるんですよ。まあ、4級ですけどね。

(22) 今日はやりたいことがあったけどできなかった。まあ、やらなかった。

(21)において、話者は「まあ」を使用することによって、P(仏検を持っていること)に対して肯定的な評価を与えつつ($P=p$)、実はそれほど評価できる事実ではない($P=\text{non-}p$: 4級に過ぎない)ことを述べている。つまり、Pに対する当初の肯定的な評価が、それに続く否定的な評価によって相対化されているのである。(22)においては、話者は当初、P(できなかった)という表現を選択している($P=p$)が、その後、「まあ」を使うことによって、Pとは異なる表現「やらなかった」($P=\text{non-}p$)の方を、よりふさわしい表現として選択している。その意味で、 $P=\text{non-}p$ は、 $P=p$ の修正である。

4.5. 拒否

この最後の用法において、「まあ」は、共話者によって提示された話題Pを、話者が強引に打ち切るような文脈でしばしば現れる。4.4.では、「まあ」の構成要素であるnon-pはPに対する話者の否定的なコメントであったが、ここでは、non-pは、共話者がPについて話題にすること自体を、話者が問題外とするという解釈を帯びる。

したがって、「まあ」の意味論の観点から言えば、話者が、共話者によって提示される $P=p$ を考慮するとしても、それは、まさに $P=p$ を否定するための名目にすぎない。その意味で、話者のポジションは $P=\text{non-}p$ として定義される。このケースにおいては、4.3.および4.4.で見たように、Pに対してpとnon-pという評価が共存し、いずれかにウエイトが置かれるというよりも、共話者に属する話題P(P

= p) を, 話者が否定する ($P = \text{non-p}$) ことから, p と non-p の間には, むしろ問主
体間関係のレベルでの対立があると言える。

4.5.1. 議論の打ち切り

(23) A: Cさんと密会したという噂は本当ですか? B: まあ, いいじゃない
ですか, そんなことは。(富樫 2002:20)

(24) A: じゃあこれについてはどう思う? B: まあ, それはまた今度とい
うことで。

(23) においては, 話者Bは, 共話者Aによる質問P (密会があったか否か) に
ついて, それを問いとして発すること自体を無効としている。(24) でも, 質問P
 (「これ」についての話者の考え) をすることによって会話の継続を望んでいる共
話者Aに対して, 話者BはPを質問としては考慮するが, それに答えないことで,
会話に終止符を打ちたい旨を告げている¹⁰。

4.5.2. 好ましくない状況の制止

「まあ」は, 次のように, 話者にとって好ましくないような状況を制止する目的
でも用いられる。

(25) [少し前から口論している2人に向かって] まあ, もういい加減やめ
たら?

「まあ」は, 事態P (口論) について, 共話者たち (口論をしている本人たち)
にとってはPは重要である ($P = p$) かもしれないが, 話者はPという事態が起
こっていること自体を問題視しており, $P = \text{non-p}$ (口論が止むこと) を主張し
ていると考えられる。ここでも, 話者は, Pは共話者へのみ関係している ($P =$
p) にすぎず, 話者自身にとって重要なのは $P = \text{non-p}$ であることを「まあ」に
よって告げている。

4.5.3. 状況の放棄

最後に, 「まあ」が独話で現れる場合を取り上げる。

(26) [まだ仕事が終わっていない状況で] まあ, 今日はもうこれで終わりに
しよう。

Pは話者が取り組んでいる仕事に相当する。話者は, 仕事の継続 ($P = p$) は必

要だとは考えているが、あえてそれを打ち切る ($P = \text{non-p}$) ことによって、 P を無効にすることが「まあ」によって強調されていると考えられる¹¹。

5. 結語

本稿では、様々な機能・用法を持つ、談話標識「まあ」について、「事態 P に関して p を適切な値として付与できない」という統一的な仮説を提案した。この仮説を元に、「まあ」の意味論を構成する p と non-p （事態 P に関する2つの評価・態度）の間の関係は均質ではなく、文脈によって様々に変容し、ある時は切り離せず、ある時は共存し、ある時は対立するような関係性に置かれることを示し、「まあ」の5つの用法を、これらの関係性の違いによって記述しようと試みた。

最後に、本稿で扱った「まあ」の5つの用法のまとめとして、 P に関する p と non-p の関係のヴァリエーションを形式的に表象することを試みたい。 p を「=」、 non-p を「 ω 」で表し、4.1.から4.5.までの5つのケースを以下のように表記する¹²。

- 4.1.「強い驚き」 : ~~ω~~
- 4.2.「閉塞状況の打開」 : = (ω)
- 4.3.「留保・曖昧性」 : =, ω
- 4.4.「疑問視・無関心」 : = , ω
- 4.5.「拒否」 : = | ω

以上の表記について以下コメントする。

4.1.「強い驚き」: P に関して、 $p(=)$ と $\text{non-p}(\omega)$ が切り離せない。この非分離性を、=に ω を被せる形で表記する。

4.2.「閉塞状況の打開」: P に関して、 $p(=)$ のみが考慮される。 $\text{non-p}(\omega)$ は存在するが考慮されない。この non-p の周辺的なステータスを()によって表記する。

4.3.「留保・曖昧性」: P に関して、 $p(=)$ と $\text{non-p}(\omega)$ が共存するが、 $p(=)$ が優先的に考慮される（それを下線で強調する）。

4.4.「疑問視・無関心」: P に関して、 $p(=)$ と $\text{non-p}(\omega)$ が共存するが、 $\text{non-p}(\omega)$ が優先的に考慮される（それを下線で強調する）。

4.5.「拒否」: P に関して、 $p(=)$ は共話者に属し、 $\text{non-p}(\omega)$ は話者に属するという意味で、両者の間に、間主体間関係のレベルで対立がある。この対立を|

で表記する。

以上の「まあ」の形式的表象は、4.1.から4.5.に進むにしたがって、最初4.1.ではpと区別できなかったnon-pが徐々に可視性 (visibilité) を増大させ、それに伴い、p (=) とnon-p (ω) の間の他性 (altérité) の度合いも増大し、最後4.5.において、両者の間の他性の度合いが最大になることを表そうとしたものである。

やや機械的なきらいもあるが、「まあ」の用法のヴァリエーションのこのような表象は、「まあ」が持つ様々な解釈が、pとnon-pの間の関係の相違から計算できることを示そうとしたものであり、他のマーカの記述にも役立てられる可能性がある。

註

- 1 本稿は、筆者がフランス語で執筆した同内容の論文Ashino (2017)の不適切な箇所を修正し、新たなデータを加え、結論部で当該のマーカに形式的な表象を与えよう試みたものである。なお、「まあ」は長さアクセントという聴覚上の印象により3つに区別できるとされるが(cf. 馮2021)、紙幅の都合上、今回はその区別は考慮しない。また、発話文における「まあ」の位置による解釈の違いも今回は扱わない。本研究は、2021年度慶應義塾大学・学事振興資金(個人研究)の助成を受けて行われた研究成果の一部である。
- 2 「まあ」がいくつの用法・機能を持ち、それをどのように分類するかは辞書や研究によって様々である。例えば、川上(1993; 1994)は、談話の中での位置によって、「まあ」を「応答型用法」(発話の冒頭に現われる)と「展開型用法」(発話内の文頭・文中に現われる)に分類している。他方、川田(2007: 176-178)は、「まあ」の機能を3つに分類している：(i)「情動的感動詞」：「驚き」などの話し手の情動の変化」(cf. 「まあ、たいへんねえ」)、(ii)「ヘッジ」：「発話行為の程度を和らげる」(「A：太郎って賢いよね？B：まあ、そうだね。」)、(iii)「フィラー」：「話し手の感情や態度が反映されているとは考え難い「まあ」の用法：「父親はかつての日本国有鉄道といういわゆる国鉄のまー職員だったということもありまして...」)。また、馮(2021: 119)は、「フィラー」の「まあ」について区別を設け、2モーラの「まあ」は「中心的主張や判断を述べる際」に用いられ、1モーラの「ま」は「前提や背景など補助的な情報を述べる際に出現しやすい」と説明している。
- 3 ただし、大工原(2015)は、「まあ」について、原則高低の調子で発音される「留保づけ用法」(「日本でリングوといったら、ま (一)、青森ですね」と、原則低高の音調で発音される「強調用法」(日本でリングoといったら、まあ (一) 青森ですね)を

区別する。「まあ」は、前者においては「『日本でリングといたら青森である』という主張を相対的に弱める」のに対し、後者においては、「『とにかく青森だ』という断言のニュアンスを加え、主張を強める」とし、両者とも「わだかまり〔 $\neg x$ 〕の存在を前提とする」が、前者は $\neg x$ を「ひとまず脇に置いて言語行為を遂行する用法」であり、後者は $\neg x$ に「伝達の価値を認めず切り捨てることで、結果として言語行為Xを際立たせ、強調する用法」とする。それに対して本稿では、後述するように、どの用法においても、程度の差こそあれ、常に「 $\neg x$ 」（本稿ではnon-p）の存在は切り捨てられずに保たれていると考える。

- 4 その意味で、「まあ」はモダリティのマーカーであると思えることもできる。
- 5 場合によっては、安定化されたものとして提示されるP（つまり $P=p$ ）に対して、non-pがその安定性を揺るがす場合もある。
- 6 Pを認識するとは、Pに対して、pという評価を与えるか、non-pという評価を与えるかのどちらかを選択することを意味するが、pとnon-pが分離できないとすれば、いずれの評価も与えられないという意味で、「認識不可能」である。
- 7 ここでは、「ああ」、「あ」、「あっ」を区別しないで扱う。
- 8 例えば、(13)の「今日は勉強したの?」という疑問文は、共話者に、勉強した($P=p$)、勉強しなかった($P=non-p$)、のどちらかの値を選択するように要求しているにすぎず、まだ共話者によっていずれの選択もされていない。
- 9 これらの例文は「まあ」がなくても成り立つが、その場合は譲歩構文の前件が後件によってただ単に相対化され、後件の方に焦点があたると考えられる。一方、「まあ」が使われた場合は、後件だけでなく、前件にも同じく焦点が当たると考えられる。
- 10 これらの例文においては、話者Bは「まあ」を使うことによって、共話者Aの質問を最低限は考慮する態度を示すことになるが、「まあ」を伴わない場合、Bの返答はAの発言・質問に対する極めて乱暴で一方的な返答拒否を表すことになる。cf.「A：Cさんと密会したという噂は本当ですか？ B：øいいじゃないですか、そんなこと。」
- 11 この例の場合、 $P=p$ という評価を担っているのは、話者自身の中にある共話者としてのポジションである。
- 12 この表記法は、Paillard (2015)を参考にしてている。

参考文献

-
- Ashino, F. (2017) : « Le marqueur discursif *maa* en japonais », *Langages*, 217, pp.117-128.
- Culioli, A. & D. Paillard (1987) : « A propos de l'alternance imperfectif / perfectif dans les énoncés impératifs », *Revue d'études slaves*, LIX/3, pp.527-534.
- Fukada-Karlin, A. (2002) : « Functions of the Attitudinal Discourse Marker *maa* in Japanese Conversation », In : Patricia Clancy (éd.) *Japanase/Korean Linguistics*, Vol.11, California:

- CSLI, pp.53-66.
- Paillard, D. (2015) : « Les locutions *en + N* dans leurs emplois comme marqueurs discursifs », *Scolia*, 29, pp. 97-114.
- 川上恭子 (1993) : 「談話における「まあ」の用法と機能 (1) : 応答型用法の分類」, 『園田国文』 14, pp. 69-78.
- 川上恭子 (1994) : 「談話における「まあ」の用法と機能 (2) : 展開型用法の分類」, 『園田国文』 15, pp. 69-79.
- 川田拓也 (2007) : 「日本語談話における「まあ」の役割と機能について」, 南雅彦 (編) : 『言語学と日本語教育』 V , pp.175-192.
- 北原保雄 (編) (2021), 『明鏡国語辞典』, 第三版, 大修館書店.
- 小出慶一 (2007) : 「フィラー化の様相—「まあ」の場合」, 『埼玉大学紀要. 教養学部』, 43 (1) , pp. 57-72.
- 大工原勇人 (2015) : 「「まあ」の強調的用法の生起条件」, 友定賢治 (編) : 『感動詞の言語学』, ひつじ研究叢書<言語編> , 102巻, ひつじ書房, pp.97-113.
- 富樫純一 (2002) : 「談話標識「まあ」について」, 『筑波日本語研究』 7, pp. 15-31.
- 柳澤浩哉, 馮文彦 : (2019) 「大学講義における「まあ」」, 『広島大学日本語教育研究』 29, pp. 9-16.
- 馮文彦 (2019) : 「「まあ」の出現しやすい条件 —教師と学生との会話を中心に—」, 『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部』 68, pp.195 – 203.
- 馮文彦 (2021) : 「自然会話と大学講義の用例から見るフィラー「マア」の二つの用法」, 『教育学研究ジャーナル』 , 26巻, pp. 111-120
- 森田良行 (1989) : 『基礎日本語辞典』, 角川書店.
- 山田葵 (2013) : 「自然談話における「マア」の使用について : 談話上の機能と話し手の情報処理のプロセス」, 『南山言語科学』 8, pp. 295-312.